

平成15年10月27日

水産庁  
独立行政法人水産総合研究センター  
西海区水産研究所

## 平成15年度第1回東シナ海漁況海況予報

- 2004年3月までの期間の東シナ海から日本海西部の海域における海況と漁況について、別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめた結果 -

### 今後の見通し(2004年3月までの期間)

#### 海況

- (1) 鹿児島南方海域の黒潮は、前半は離岸、後半は離接岸をくり返しながら経過する。
- (2) 九州西方の対馬暖流水は、前半は「東寄り」、後半は「西寄り」で経過する。
- (3) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

#### 漁況(来遊量予測)

- (1) マアジ：前年並み。
- (2) マサバ：前年並み。
- (3) ゴマサバ：前年を上回る。
- (4) マイワシ：極めて少ない。
- (5) ウルメイワシ：前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：前年・平年並み。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk15/15gkindex.htm>)に掲載されます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下の通りです。  
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：竹葉・狭間  
住所：〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1  
電話：03-3502-8111(内線7376) 03-3501-5098(直通)  
ファックス：03-3592-0759  
電子メール：toru\_hazama@nm.maff.go.jp  
水産総合研究センター西海区水産研究所企画連絡室  
住所：〒851-2213 長崎市多以良町1551-8  
電話：095-860-1626 ファックス：095-850-7767  
電子メール：kiren@snf.affrc.go.jp  
(海況担当：中川倫寿 095-860-1623；漁況担当：檜山義明 095-860-1634)

## 参 加 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産試験場
福岡県水産海洋技術センター	(社)漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所
長崎県総合水産試験場	
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産試験場	

# 平成15年度第1回東シナ海海況予報

## 1. 今後の見通し(2003年10月～2004年3月)

### (1)海流および水系分布

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、前半は接岸傾向、後半は離接岸をくり返しながら経過する。

九州西方における対馬暖流水の分布は、前半は「東偏」、後半は「西偏」で経過する。

### (2)表層水温

前半には、山口県沿岸・沖合と対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、沖縄島周辺海域は「平年並み」、西薩・甑沖、薩南沿岸、黒潮域、大陸棚上は「平年並み～やや高め」で経過する。

後半には、山口県沿岸・沖合と壱岐水道、五島西沖、五島灘は「やや高め」、対馬東水道と天草西沖、沖縄島周辺海域は「平年並み」、西薩・甑沖、薩南沿岸は「平年並み～やや低め」、黒潮域、大陸棚上は「平年並み～やや高め」で経過する。

## 2. 経過(2003年4月～2003年9月)

### 1. 大陸棚上

#### (1)水系

中国大陸沿岸水は4・5月は「西偏」、6・7・8月は「東偏」で経過。

#### (2)海面水温

4月 北部「やや低め」、南部「平年並み」。

5月 北部、南部とも「平年並み」。

6月 北部、南部とも「やや低め」。

7月 北部、南部とも「平年並み」。

8月 北部、南部とも「やや高め」。

9月 北部、南部とも「かなり高め」。

### 2. 黒潮流域

#### (1)海流・水系

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季、夏季ともに「平年並み」。流量は、春季、夏季ともに「平年並み」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、5月下旬と7月下旬、8月下旬を除き「離岸」で経過。

#### (2)海面水温

4・5月：「やや高め」。

6・7月：「平年並み」。

8・9月：「やや高め」。

### 3. 対馬暖流域・沿岸域

#### (1)海流・水系

対馬暖流水の分布位置は、4・5月は「西偏」、6・7・8月は「東偏」で経過。

## (2)表層水温

山口県沖合：4～9月は「平年並み」。

山口県沿岸：6月の「やや低め」を除き、「平年並み」。

対馬東水道：4～8月は「平年並み」、9月は「やや高め」。

壱岐水道、五島西沖：4・6・8月は「平年並み」。

五島灘：4月は「やや低め」、6月は「はなはだ高め」、8月は「平年並み」。

天草西沖：4・5月は「平年並み」、6月は「やや高め」、8月は「平年並み」。

西薩 甕沖、薩南沿岸：4・5月と8月は「平年並み」。

薩南沖合：4月は「かなり低め」、5月は「平年並み」、8月は「やや高め」。

沖縄島南東：6月は「やや低め」、8月は「かなり高め」。

## (3)表層塩分

山口県沿岸・沖合：4・7月は「やや低め」、5・6月と8・9月は「平年並み」。

対馬東水道：4月と6・7月、9月は「平年並み」、5・8月は「やや低め」。

壱岐水道：4・6・8月は「平年並み」。

五島西沖：4月は「やや低め」、6・8月は「平年並み」。

五島灘：4・6・8月は「やや低め」。

天草西沖：4月は「平年並み」、5月は「はなはだ高め」、6月は「平年並み」、8月は「やや低め」。

西薩 甕沖：4月は「平年並み」、5月は「かなり高め」、8月は「やや低め」。

薩南沿岸：4月は「やや高め」、5月は「平年並み」、8月は「はなはだ低め」。

薩南沖合：4・5月は「やや高め」、8月は「はなはだ低め」。

沖縄島南東：6月は「やや高め」、8月は「平年並み」。

## 3.現況(2003年10月)

### (1)大陸棚上

海面水温は北部では「やや高め」、南部では「かなり高め」。

### (2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「やや高め」。

### (3)対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

## 東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

### 今後の見通し(2003年11月～2004年3月)

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚(2003年級群(2003年生まれ))、1歳魚(2002年級群)、2歳魚(2001年級群)、  
魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

#### 1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並み。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)及び19～24cmの1歳魚(小銘柄)が主に、  
24cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

#### 2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚(豆銘柄)及び29～32cmの1歳魚(小銘柄)が主に漁獲される。

#### 3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3) 魚体：25～30cmの0歳魚(豆・小銘柄)及び31～35cmの1歳魚(中銘柄)が主に漁獲される。

#### 4. マイワシ

(1) 来遊量：極めて少ない。

(2) 漁期・漁場：まとまった漁場は形成されず、散発的に沿岸域で漁獲される。

(3) 魚体：15cm程度の0歳魚(中羽銘柄)が主に、18～20cmの1歳魚(大羽銘柄)も漁獲される。

#### 5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が主に漁獲される。

## 6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期は前半に集中する。

(3) 魚体：10cm程度の0歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2002年11月～2003年3月。「平年」は過去5年の平均値。

## 漁況の経過（2003年4月～8月）および見通しについての説明

### 1. 資源状態

#### (1) マアジ対馬暖流系群

対馬暖流域（東シナ海、九州北・西岸域、日本海）に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代に増加し1992～1998年には高水準を維持した。その後、1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2002年の加入量は1994～1997年の水準に回復した。対馬暖流域におけるマアジの漁獲量は、1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2001年は13～15万トンに減少し、2002年は13万トンであった。

#### (2) マサバ対馬暖流系群

対馬暖流域に生息するマサバの資源量は1975～1990年に漸減した後、1991～1996年は増加傾向を示したが、1997年以降減少し、2000～2002年は低い水準にある。対馬暖流域におけるマサバの漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降漁獲量は増加傾向を示し、1996年には40万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2001年は75千トン、2002年は80千トンと低い水準にある。

#### (3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1997～1999年に増加した後、同程度の水準を保っている。東シナ海、日本海におけるゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、2000年は46千トン、2001年は63千トン、2002年は45千トンと推移している。

#### (4) マイワシ対馬暖流系群

1980年代後半から1990年代前半にかけて、対馬暖流域においてマイワシは多く漁獲されたが、その後急激に減少し、2001年・2002年の漁獲量は約1000トンであった。この間、1999年に0歳魚がやや漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は加入が悪いため資源は極めて低位で推移している。産卵親魚量も少ないために、資源が急速に回復する可能性は低い。

#### (5) ウルメイワシ対馬暖流系群

近年の対馬暖流域におけるウルメイワシの漁獲量は 1993 年に最大となったあと 2000 年まで漸減傾向にあった。2001 年と 2002 年は 0 歳魚の加入がやや良かったため、資源量はやや上向いている。

#### (6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990 年代以降では、1995・1996 および 1998 年～2000 年にかけて資源は高水準で推移した。2001 年の夏期までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001 年秋期以降は加入が悪い状態が続いている。2002 年秋期と 2003 年春期もやや加入が良かった。

### 2. 漁況の経過

2003 年 4～8 月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖および東シナ海中・南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計 5 万 1 千トンで前年（2002 年 4～8 月）の 4 万 7 千トンと同程度であった。マアジは 2 万 4 千トンと前年（1 万 7 千トン）を上回り、さば類は 1 万 9 千トンで前年（2 万 3 千トン）を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表 1 のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には前年並みであった。漁獲の主体は、15～20cm の 1 歳魚と 15cm 以下の 0 歳魚であった。マサバは、長崎県で前年を上回ったが、そのほかでは前年・平年を下回った。漁獲の主体は 30cm 以下の 0・1 歳魚であった。ゴマサバは前年を上回った。体長 30cm 以上の 1 歳魚が主に漁獲された。マイワシは依然として少なかったものの、前年を上回った海域が多かった。漁獲の主体は 13～20cm の 1・2 歳魚であった。ウルメイワシは前年・平年を下回った。漁獲の主体は 0 歳魚であった。カタクチイワシは前年・平年並みであった。前半は漁模様が良かったが、後半にはやや落ち込んだ。漁獲の主体は、前半は 10cm 程度の 0 歳魚（大羽銘柄）で、後半はそれに小羽が加わった。

### 3. 今後の見通しの説明

#### (1) マアジ

例年、11～3 月期には 0 歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、1 歳魚（小銘柄）2 歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2001 年級群は豊度が高く、2002 年級群も 2001 年級群よりは低いものの比較的豊度が高いと考えられる。2003 年級群について、2003 年 2～4 月に行った仔稚魚分布調査では東シナ海南部海域を中心に 2002 年と同程度の分布密度が見られ、6～8 月調査時には九州～日本海西南沿岸域に広く分布していた。南部海域（鹿児島県）の漁況は前年より低調であるが、2003 年級群の豊度は 2002 年級群と同程度であると推測される。

#### (2) マサバ

例年、11～3 月期には 0 歳魚（豆銘柄）と 1 歳（小銘柄）が漁獲の主体となる。2002 年級群の豊度は低い。2003 年級の評価は難しいが、6～8 月には 2003 年級群とみられる銘柄の漁獲量が前年を上回っており、2003 年級群の豊度は 2002 年級群より高いとみられる。

### (3) ゴマサバ

例年、11～3月期には0歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では2002年級群が引き続き漁獲されることが期待される。2003年級群の評価は難しいが、大中型まき網では7～8月には2003年級群とみられる銘柄の漁獲量が前年を上回っており、2003年級群の豊度は2002年級群より高いとみられる。

### (4) マイワシ

資源は極めて低位である。今期は2003年級群を主体として、1・2歳魚が漁獲の中心となるが、これらの加入水準は低い。このように、資源が極めて低位の現在では、まとまった漁場は形成されず、沿岸域で散発的に漁獲されるとみられる。

### (5) ウルメイワシ

2001・2002年の加入量はそれ以前よりも良好であった。今期は2003年級群を主体として、冬期には2001・2002年級群も漁獲されよう。2003年級群の豊度は2001・2002年級群よりもやや低いとみられるため、来遊量は前年・平年を下回ろう。漁期は今期の前半に集中し、漁獲の主体は0歳魚(15～20cm)で1歳魚(20～25cm)が混じるであろう。漁場は長崎県以南の海域であろう。

### (6) カタクチイワシ

前期の漁獲量は北部海域で前年をやや上回り、南部海域で前年を下回った。北部海域で来遊量はやや高い傾向は今後も続くと考えられる。2002年秋期発生群と2003年春期発生群の加入はやや良好と推察される。今期は2003年春期発生群を主体に2003年秋期発生群が加わる。2003年春期発生群の指標となる音響調査の現存量指標値及び秋期発生群の指標となるニューストーンネット採集によるシラス密度は、いずれも前年を下回っている。ただし、今後の秋期発生群の加入が良ければ、来遊量が前年を上回る海域もあろう。漁期は前半に集中し、漁場は沿岸域に形成されよう。魚体は、2003年春期発生群(10cm程度)を主体に、前半には秋期発生群(5cm程度)も漁獲される。

表1. 沿岸域の漁況経過(2003年4～8月)

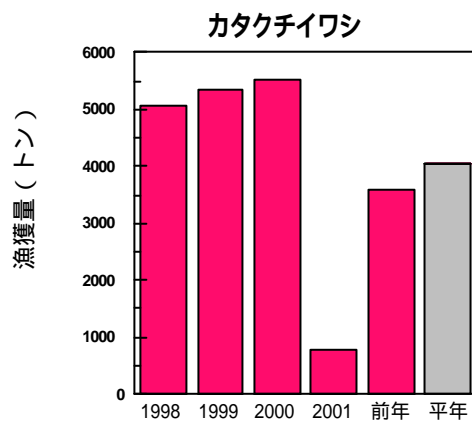
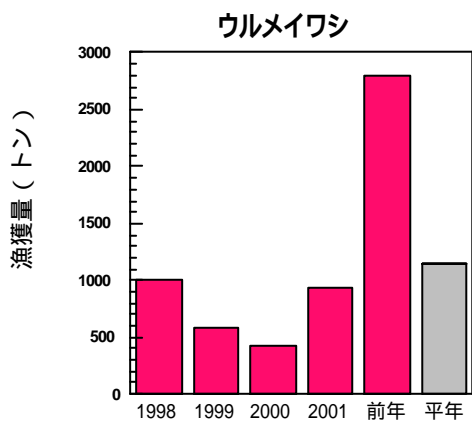
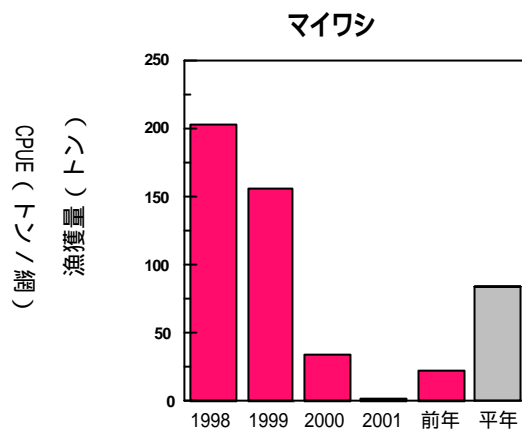
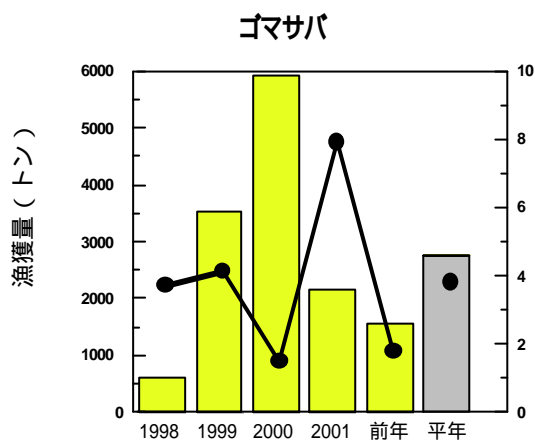
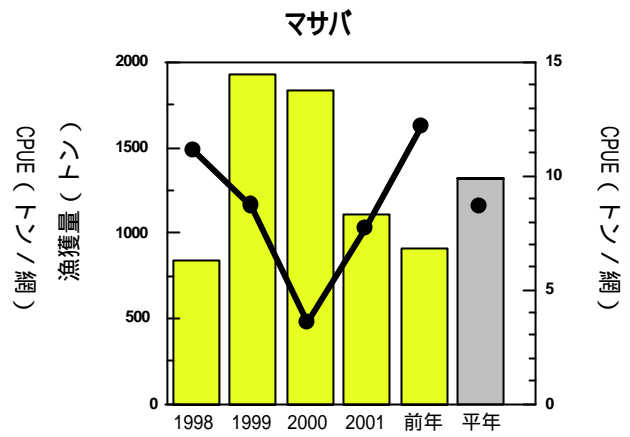
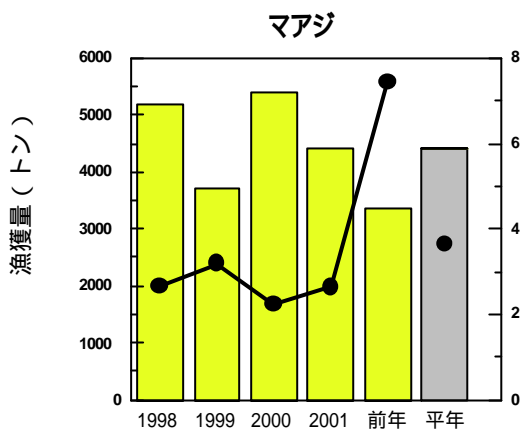
	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網での水揚げは前年比84.7%と前年を下回り、平年比71.3%と平年を下回った。棒受、すくい網では、マアジ当歳魚(ゼンゴ)が前年比558.2%であるが平年比33.9%と平年を下回った。	中型まき網では前年比32.8%、平年比36.3%と前年・平年を下回った。棒受・すくい網ではギリサバが水揚げされ、前年比25.6%、平年比35.9%と前年・平年を下回った。	
福岡	前年・平年に比べ好漁、代表港まき網漁獲量は948トンで平年の1.4倍。銘柄はダイ、チュウが主体。同じく棒受網は127トンで平年の83%であった。銘柄は小・マメが主体であった。	代表港まき網の漁獲量は63トン。平年の55%、前年の79%と少なかった。まき網では中銘柄、棒受網では小銘柄が主体であった。	代表港におけるまき網の漁獲量は約1トンで、前年の74%、平年の84%であった。



佐賀	前期の漁獲量は前年、平年を下回った。(前年比48.1%、平年比64.5%)	前期の漁獲量は前年、平年を下回った。(前年比38.9%、平年比20.4%)	
長崎	前年を上回り、平年を下回った。(前年比126%、平年比90%)	地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年を下回った。(前年比216%、平年比66%)	
熊本 牛深港	水揚量が365.0tで平年比68.5%、前年比95.5%であった。	水揚量は70.8tで平年比13.4%、前年比30.4%であった。	
鹿児島	4～6月は、豆・小アジ(2002年級群)主体に、7月以降は、アジ仔・豆アジ(2003年級群)主体に推移した。期間中合計1,525トンの水揚げで、前年比60%、平年比63%。		4～5月は、大(3歳以上)及び小(2002年級群)主体に低調であったが、6月以降は中・小(2002年級群主体で2001年級群も混獲)主体に好調な水揚げが続いている。期間中、5,130トンの水揚げで、前年比711%、平年比175%。

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	棒受・すくい網で、ヒラゴ主体で前年比15.2%、平年比0.3%と引き続き漁獲量は少ない。	棒受・すくい網で中・小銘柄が水揚げされており、水揚量は前年比124.3%、平年比92.6%であった。	棒受・すくい網で中・小、カエリ銘柄が主体で、前年比124.0%平年比130.6%と前年平年を上回った。
福岡	代表港における巻き網の漁獲量は、4トンで平年の30%であった。前年の50倍の漁獲であった。	代表港まき網の漁獲量は39トン。前年の34倍、平年並の漁獲であった。同じく棒受網の漁獲量は、16トンで前年の30倍、平年の80%であった。	代表港まき網の漁獲量は4トン。前年の24%、平年の64%と不漁であった。同じく棒受網の漁獲量は、25トンで前年の57%平年の30%と不漁であった。
佐賀	2年ぶりに1tを越える水揚げがあり、前年を大きく上回り、平年を下回った。(前年比1964.7%、平年比18.0%)	前期の漁獲量は前年を大きく上回り、平年を下回った。(前年比431.1%、平年比64.7%)	前期の漁獲量は前年並みで、平年を下回った。(前年比97.8%、平年比67.0%)
長崎	前年同様、漁獲は低調に推移した。	前年・平年を下回った。(前年比35%、平年比45%)	地域により、差があるが、概ね前年・平年を下回った。(前年比77%、平年比78%)
熊本 牛深港	水揚量は19.8tで平年比146.3%、前年比953.2%であった。	水揚量は316.9tで平年比59.5%、前年比25.9%であった。	水揚量は1,869.9tで平年比153.2%、前年比595.3%と漁獲はやや回復した。
鹿児島	8.3トンの水揚げで、まとまった漁場は形成されなかった。(前年比7,303%、平年比7.4%)	小羽・中羽ウルメ(2003年級群)主体に1,080トンの水揚げで、前年比63%、平年比73%。まき網、棒受網計。	4～7月は、大羽(12～14cm)主体で、夏以降は小中羽(2002年級群)主体となった。期全体で1,025トンの水揚げがあり、前年比141%、平年比115%。まき網、棒受網計。

注:「前年」は2002年4～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1網当たり漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは福岡県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は福岡県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。